聖霊降臨後第７主日　　２０２６年　７月　１２日

風のように

甘木教会

主任牧師：崔大凡　　牧会委嘱牧師：竹田孝一　（ミルトス）

10 雨も雪も、ひとたび天から降れば、むなしく天に戻ることはない。それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ、種蒔く人には種を与え　食べる人には糧を与える。11 そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も　むなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす。12 あなたたちは喜び祝いながら出で立ち平和のうちに導かれて行く。山と丘はあなたたちを迎え、歓声をあげて喜び歌い、野の木々も、手をたたく。13 茨に代わって糸杉が、おどろに代わってミルトスが生える。これは、主に対する記念となり、しるしとなる。それはとこしえに消し去られることがない。　　イザヤ 55:10～13

23 良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて悟る人であり、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶのである。　　マタイによる福音書 13:23

【説教要旨】 種まく人

先日、急死された大森教会の信徒さんと毎週、庭の手入れをし、その方と庭に聖書に関する木、季節の花を植えていました。アーモンド、オリーブ、いちじく、バラ・・・。ここで出てくる茨はバラのように棘のある低木です、おどろとは棘（とげ）という漢字で「草木・いばらなどの乱れ茂っていること。また、その場所やそのさま。やぶ。」という意味です。糸杉は建材、楽器になどに使われた。ミルトス（銀梅花）は、「仮庵祭」で使われる４つの植物（ナツメヤシの葉、アラバ：かわやなぎの枝、エトログ：シトロン、ミルトス）のひとつで、切られた後も生命力が強く、枯れ難いところから、干ばつにも耐える強木として、不死の象徴となり、それゆえ成功・繁栄の象徴ともなったのです。

４０章から５５章までは第２イザヤと呼ばれ、６０年の辛苦に満ちた日々のバビロン捕囚末期から捕囚からの解放の時代を生きた預言者です。紀元前 597～538 年の約６０年に渡る捕囚は人びとの民族として自尊心を失いつつあったときイスラエルの人を慰め、神の民としてどう歩むかを示しました。第２イザヤは自分たちの歩みは、虚しいものではない、必ずエルサレムへ帰還できると予言するのです。その結びが５５章です。

歴史が示す事実は、エルサレムからバビロニアに連れて来られた人々は、エルサレム神殿の祭儀を失ったので、バビロニアでは、それにかわって安息日礼拝が中心になり，会堂における律法の朗読と祈祷を中心とする新しい礼拝様式が始めました。またこの時期にモーセ時代から彼らの時代までの歴史，すなわち『申命記』から『列王紀』が編纂されました。祭儀中心でなく、み言葉、律法として祭りを守り、み言葉を中心とし生かされていく自分たちを形成していきました。この６０年の苦しみが新しい神の民を形成していくのです。

民族の未曽有の困難と苦しみの中で、彼らはみ言葉、律法として祭りを守る新しい礼拝を、新しい生き方を神によって造り変えられていきました。

苦難と失敗に満ちた捕囚の日々を終わることをはっきりと彼らはイザヤから告げられるのです。

10 雨も雪も、ひとたび天から降れば、むなしく天に戻ることはない。それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ、種蒔く人には種を与え　食べる人には糧を与える。11 そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も　むなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす。12 あなたたちは喜び祝いながら出で立ち平和のうちに導かれて行く。

あの巨大のバビロニアは滅ぼされ、今、奴隷から解放されるなど誰が想像したでしょう。神の言葉はむなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす。12 あなたたちは喜び祝いながら

出で立ち平和のうちに導かれて行こうとされています。
　2020年のコロナ感染の時、私は次のように説教しました。
　「私たちは、コロナウィルス感染により、苦難のうちあり、未来を予想出来ない状況にあります。茨とおどろが私たちの世界を覆っていて、未来を感じえず、不安の内にいます。しかし、私たちが眠っていても、確実に神は歴史を動かされています。それが聖書の歴史が教えることです。
　茨に代わって糸杉が、おどろに代わって不死の象徴となり、ミルトスが生えるのです。
　６０年の苦難の歴史で起きたことは、いままでの神殿を中心とした信仰、生活から、み言葉、律法としての祭りを守って信仰、生活を整えていき、豊かな宗教史としての旧約聖書を編纂し、ユダヤ教を成立させ、新たな神の民が生れました。第二イザヤの結論はわたしの口から出る神のことばが人を生かすのです。私たちは今回の新型コロナウィルス感染に長い苦難の内を歩まなければならないかもしれないが、その中で私たちの教会はみ言葉をどう届けるかということに心血を注ぎました。み言葉こそ私たちを生かすという強い信仰です。」と。
　23良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて悟る人であり、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶのであると主は私たちに語り掛けてくださっています。み言葉を聞くものは豊かな実りの人生とされるのです。神の言葉はむなしく終わりません。コロナ後、私たちは時代は大変化しています。その中で、人類が終わるのではないかという危機の中にいますが、ルターは、中世から近世へと時代が変化していく中で「キリスト者の自由」で次のように語ります。
　第5　魂は、聖なる福音、すなわち、キリストによって説教された神のことばのほかには、自らが生き、義であり、自由であり、キリスト者であるようにするいかなるものも、天においても、地においても持っていない。キリストご自身が、ヨハネによる福音書第11章(25節)に「私こそいのちであり、復活である。私を信じる者はとこしえに生きる」とか、同じくヨハネ福音書第17章(14・6)に「私こそ

道であり、真理であり、いのちである」とか、同じくマタイ福音書第4章(4節)に「人はパンのみによっていきるのではなく、神の口から出るすべてのことばによって生きる」と言われるとおりである。だからわれわれは、魂が神のことば以外のあらゆるものをなしですますことができるが、神のことばがなければ、他のどんなものをもってしてもなんのたすけにもならないことを確信しなければならない。しかし、魂が神のことばをもっているなら、もはや他のどんなものも必要としない。

牧師室の小窓からのぞいてみると

世も末

国際サッカー連盟が、退場させられたアメリカの選手の出場停止処分をアメリカ大統領の意向を受けて変更したし、批判をうけています。

綺麗ごとではすまないのがスポーツの世界ですが、これほど露骨に政治がスポーツに圧力をかけ、この圧力にスポーツが負ける分かりやすい事件は何を意味するのであろうか。

良心の欠落です。そしてその良心は人と人との関係でなく神と人との関係で起こるのです。良心の欠落は罪です。この罪はいつか人類が払うことになるでしょう。世も末です。

園長・瞑想？迷走記

幼保小連携ということが言われています。では、具体的なこととなるとまだまだはっきりとしていません。今年の夏休みに小学校一年生から６年生までのホームカミング、「一泊保育」をします。みんなが幼稚園に帰って、楽しかった思い出となった「一泊保育」を通して、小学校で成績によって、色々と思うことがあって荷を負っている子どもたちが幼稚園で楽しく、心を開放できる一日であって欲しいと願ってやります。

幼保小連携とはという難しいことを言わないで、子どもたち出合う場も作るのも幼保小連携ではないだろうか。

日毎の糧

聖書：65:10 あなたは地に臨んで水を与え／豊かさを加えられます。神の水路は水をたたえ、地は穀物を備えます。あなたがそのように地を備え65:11 畝を潤し、土をならし／豊かな雨を注いで柔らかにし／芽生えたものを祝福してくださるからです。65:12 あなたは豊作の年を冠として地に授けられます。あなたの過ぎ行かれる跡には油が滴っています。
65:13 荒れ野の原にも滴り／どの丘も喜びを帯とし65:14 牧場は羊の群れに装われ／谷は麦に覆われています。ものみな歌い、喜びの叫びをあげています。　　詩篇６５：１０－１４

ルターの言葉から

罪を感じない者は、恵みを求めず、福音も信仰も求めないからである。

『慰めと励ましの言葉　マルティン・ルターによる一日一生』湯川郁子訳　徳善義和監修
教文館

神が与える

詩篇６５篇は神を讃美する詩編である。

この詩編は、大きく分けると4部からなって、それぞれの部で、主題がしっかりとある。

今週の讃美頌は、第４部（１０節～１４節））で、「豊穣の恵み」という主題であり、これを詠ったものである。

この詩篇で注目したいのは、神に二人称（「あなた」）を用いている点で全体を一貫させているということである。

穀物を与え（１０節～１２a節）、油を与え（１２節b～１３節a）、家畜を与えた（１３節b～１４節a）のは、「あなた」、神であると詠う。この詩篇から私たちが聞くことは、私たちの力で穀物を、油を作り、家畜を得るのではなく、神に与えられるものであるという詩篇の感性である。現代人がもっとも忘れている感性である。与えられるという感性こそ、感謝が起こり、歌となり、喜びの声となっていくのである。

参考：「詩編の思想と信仰Ⅲ」　　月本照男　　新教出版

祈り：私たちを謙遜し、自分で全てを得るのでなく、あなた、神に与えられるのだという心を起こしてください。アーメン。

甘木通信

4:9 ひとりよりもふたりが良い。共に労苦すれば、その報いは良い。 4:10 倒れれば、ひとりがその友を助け起こす。倒れても起こしてくれる友のない人は不幸だ。　　コヘレト４：７～１２

　ブラジル時代、血縁の家族と別れて来た移民の人たちは、疑似家族を作って、教会は、実家となる。礼拝堂から２階の牧師館との仕切りはなく、「こんにちは」と、何の断りもなく、冷蔵庫は、開けられる。逆にこどもが生まれた時は、産婆、小児科医師、看護師の信徒、料理上手な信徒が毎日、来てくださり、居候の青年たちがオムツを洗い、食事を作ってくれたなど逆に助けられることが多くあった。実家の一大事と。こうだから、教会、牧師との関係性が濃くなる。

　「ひとりよりもふたりが良い。共に労苦する」ということ、「三つよりの糸は切れにくい。」という世界を作っていくのが牧師家族の役割だった。信仰だけでなくそれぞれ人の生活に寄り添い、それぞれの生活、考え方が違っても、共に生きていくには、「ひとりよりもふたりが良い。共に労苦する」、「三つよりの糸は切れにくい。」ということを血縁と別れ、遠くにいるからこそ、教会の人は真剣に、強く大切にしたと思う。

　日本に帰ってきてこの感覚から抜け切れずに教会での牧師と信徒、牧師と牧師、信徒と信徒との関係性の薄さに驚いた子どもたちは、食事する時、「どうして、今日はお兄ちゃんたちいないの」と。こんな牧師家族と接し、信徒さんは、日本の他の牧師との違いに変な感覚をもち、とまどったと思う。

　長い牧師生活で、私が学んだことは信徒さんと共に労苦するということの幸いである。

（甘木日記）土）午後から教会へ。日）７時ごろ雷、激しい雨。さて礼拝と思う時雨も止む。インドネシアの青年、女学校の子で若い。聖餐式。月）羽村幼稚園の仕事後、家内と博多に。飾り山笠が。夏。火）水）梅雨明けとともに、いつものように日本で一番暑くなる。木）松崎保育園から久留米に帰り入園説明会、園長会。37℃を越す中を歩いて帰ったので日射病か熱っぽくなり経口飲料を飲む。金）危険の暑さと気象情報。昨日の夜まで元気だったがメダカが死んでいる。(T_T)

おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。はぐちらない聖人（牧師）もいますが。

（教会で取れた初ゴーヤ）

土）昨夜作った青じそ漬けをもって、昼から甘木教会へ電車に行く。車に乗れるようになったので、教会で必要な物を遠方まで買えるようになった。では、何を買ったか。日曜日のお昼におにぎりを出そうとおにぎりの型抜きを購入。週報などを印刷。インドネシア語に転換しながらしばらく来ていない青年たちを思う。日）７時ごろ雨戸を開けたとたん礼拝は出来るのかと案じるほどの雷と大雨となる。しかし、礼拝が始める時、雨も止み「ほっ」とする。ミッションスクールの礼拝出席奨励日か、大学生が２名出席してくれた。また昨日の私の想いを神さまが汲み取ってくださり、インドネシアの青年が久しぶりに礼拝に出席。若い子が増えた礼拝。久留米教会・役員で幼稚園の報告をするために早く帰る。幼稚園は何よりも教会の業。教会学校に卒園生、保護者、職員が来てくださったと聞く。段々自然に教会と幼稚園が結びついていっている。月）休みだが、午前中は羽村幼稚園の仕事をし、午後からは家内が傘を買いたいと言うので博多まで行く。探し求めて新天神町商店街に。「傘修理」、良いね。夜は博多の屋台・「玄海」で天ぷら。お客にモロッコ人、そして隣の客が高校の同窓生、後輩。まだ、山城屋と言うデパートがあった時代。もう、山笠の季節。飾り山笠が街々にあった。火）二人が転勤し、園児が減る。経営には痛い、痛い。暑く疲れた。水）梅雨明け。強い日差し。職員会議後の夕刻、卒園生の家族が集まってきた。「幼稚園、幼稚園」と言うので来ました。逆に２名の園児が転勤する。小さな幼稚園には大変な事態。９月にむけて教育・保育体制を決めていく。木）松崎保育園で礼拝。一機、クーラーを設置したと聞く。真夏日。35℃を超えいく日々が続くだろう。日善幼稚園に帰り入園説明会に参加。鳥獣センターから帰った子どもたちは、一直線にプールに。汗流しつつ水遊び。家内は私に代わって甘木教会へ。夕刻から園長会。時代の変化の中で制度は日々、動き追い付いていくのに大変である。37℃の中を歩いて帰ったせいか、日射病になったようで、経口飲料を飲む。金）朝、メダカを見ると10匹中６匹が死んでいる。土に埋める。暑さのためか。38℃を超えて脱水症警戒アラートは鳴りっぱなし。危険、危険！

（新天町飾り山笠）